

特定研究論文Ⅱ

農村の住民による地域づくりと自然再生活動の展開

—山形県戸沢村、宮城県田尻町の事例より—

A4PD1304

東北大学大学院教育学研究科成人継続教育論研究コース

出川真也

目次

はじめに

第1章 自然と文化を学び、教えることで地域再生～農山村の住民による里地里山再生の取り組み～
..... 1

第2章 渡り鳥と農業の共生を目指した自然再生～宮城県田尻町・燕栗沼と周辺の水田湿地～
..... 9

おわりに

参考資料・文献

特定研究論文Ⅱ

農村の住民による地域づくりと自然再生活動の展開

—山形県戸沢村、宮城県田尻町の事例より—

東北大学大学院教育学研究科博士後期課程成人継続教育論研究コース

出川真也

はじめに

—農村の地域作りにおける自然再生活動の多義性—

現在、日本各地で住民による地域作り活動が盛んに行われている。本稿で取り上げるのは、そうした中で農村における地域作りの活動であり、とりわけ「自然再生」といった視点を伴う事例を取り上げる。「自然再生」とは、近年環境保全の分野で出てきた概念である。平たく言えば、これまで人間の活動によって壊されてきた自然環境を取り戻すことを示す。しかし、特に人の手によって形成された 2 次的自然環境が大部分を占める日本の場合、このことは環境を形成する基盤となった、人の自然に対する感性、人の営み、人と人とのコミュニケーション（結い、講などに代表されるような）などの再生をも意味するものなのである。

本稿では農村の地域作りを自然再生活動の文脈で読み直し、その展開の諸相と今後の方向性を運動に参画する人々の動きから、2つの事例を通して記述する。このことは、結果的に、現代社会が抱える環境問題とコミュニティのあり方とその課題を解決するための積極的な姿勢とは何かということを示唆することになるだろう。

—多主体が絡まりあう複合的な運動の展開—

農村の自然再生活動は、様々な主体が絡まりあう。本稿では、現場で実際に取り組む住民を主体として筆を進めることになるが、住民だけで運動が展開するわけではない。行政、NPO・NGO、研究者、企業などが時に相互に絡み合いながら複雑に入り、筆者もそうした外部参入者の絡まりあいの中の一員でもあるのである。これら他種多様な参画者はそれぞれの思惑をもって入っているものであり、かならずしも運動の統一的なスローガンを形成し共有するものではない。しかしながら、一つの運動は時に相互に対立する多主体のそれぞれの動きの中で機能し、展開していくものなのである。これは統合的なアイデアや理論を拒むものであり、本稿もこうしたことから（唯一の、あるいは客観的な）結論を導き出しているわけではない。むしろ住民と地域社会を取り巻く他主体の諸相を、可能な限り浮き彫りにすることを目指したものであるとして読んでいただければ幸いである。

2つの自然再生活動の事例について

取り上げる2事例は、次の点で対照的である。

戸沢村の事例は地域住民、公民館活動と学校が協働してつむぎあげ育て上げてきた地域

ぐるみの教育活動が主題となる。それは里山、里地、里川での暮らしの知恵や技術を子ども達に継承する活動である。農作業体験やわら細工作り、炭焼き、川遊び、山菜採り……。教えるのは地域のお年寄りで、若い世代と双方向のコミュニケーションが復活した。自然の復元だけでなく、文化の継承、農林業の担い手育成、さらに産品買い這うといった多面的な要素が重なる事例である。

宮城県田尻町の事例は、外部の環境保全団体や研究者、活動家の動きが発端となって、農家を中心とする地元の意識を変えつつあり、地域ぐるみでの再生活動へと向かう萌芽を見せる。宮城県田尻町の蕪栗沼。ここは秋になると雁などの渡り鳥が群れとなって降り立つ。この沼を舞台に渡り鳥を保護する運動は、活動範囲を周辺の農村地域に広げ、人と渡り鳥が共存する環境保全型の農業と地域作りを目指すまでに発展している。世界を移動する鳥たちを追う研究者や自然保護団体、農業関係者、行政が連携を取りながら、地域と自然の再生に向けて歩みを続けている。

二つの事例を通して農村の住民を主体とした地域作りの諸相を自然再生活動から浮き彫りにしてみたい。

第1章

自然と文化を学び、教えることで地域再生～農山村の住民による里地里山再生の取り組み～

1、豊かな自然、厳しい暮らし、地域の人々の結びつき、そして新たな気づきへ

山形県最上郡戸沢村は、最上川が庄内平野へと出ようとする山間地、最上峡にある。かつての舟運の要衝で、現在では最上川舟下りの観光船が大河を上下している。最上川に流れ込む支流はいずれも溪流釣りのメッカと言われるほど釣り客には人気がある。村の北部は田園風景の小平野が広がり、中央部は最上川沿いに川港の町並みが続き、南部は出羽三山の月山に連なる山村となる、多様性に富んだ地形と景観を持っている(本稿末略図1参照)。

こうした美しい風景とは裏腹に村は大変困難な歴史を綴ってきた。有数の豪雪地帯で、地区によっては2m以上の積雪に見舞われる。農業は水田単作地帯に若干の畑作がある程度で、大多数は第2種兼業農家。経済的には豊かと言うには及ばない東北のよくある人口わずか6300人の農村だ。教育委員会の寺内恵一さんは言う。「おらだの村はもう、ほんて(本当に)貧乏村だったんだ。凶作と自然災害の歴史がある。昭和初期には農村更生運動の指定地になったほどだから。しかし、それを住民の団結の力で克服してきた。昭和初期に、相扶共済(国民健康保険)第1号に認可されたのも、そうした住民の力だったんだべ。」

今、戸沢村では「住民の力」による子ども達へ向けた地域再生の取り組みが活発になっている。「子ども達に、地域の自然や文化を教え伝えること、このことが大切だと気がついたんだ。何も無い村じゃない。実はお宝が俺達の回りにはいっぱいあった。それに気がついていないだけなのさ。村の暮らしに自信と誇りをもって育つことは、子ども達が将来生きていく上で、重要な体験となるはずなんだ。」私が村を訪れたきっかけはこうした地域で熱い思いをもって取り組んでいる地域の面白おじさん達に惹かれたからだった。

2、活動の発端 ～地域再発見と、危機感、伝えたい自然と文化～

戸沢村は農村地域であるとはいえ、昔から生産性がそれほどよいというわけではなかった。北部の戸沢地区を除けば、古口地区、角川地区ともあまり農業生産効率が高いとは言えない。昭和初期には国の農村更正運動の指定を受けるほどだった。

さて、今につながる活動は10年前にさかのぼる。

(1)古口地区 地域の自然への気づきと最初の動き

特に古口地区は圃場も比較的小さく、使い勝手の悪く条件の悪い圃場はまったく土地改良事業が行われなかった。しかし意外にも、最初の動きはここから始まった。そこは地元の人から「北の妙」と呼ばれている。村内で数少ない専業農家(古口地区在住)の山内重男さんは次のように語る。「土地改良事業が行われて、今やみんな長方形の立派な田んぼになってるべ。けど、逆にここはまったくそういうことがされていないから、むしろそこが面白いんじゃないか、と思った。そして、ここだからこそ、メダカやホタルがよく見られるということも分かってきたんだや」教育委員会の寺内さんも古口在住で「北の妙」から近いところに住んでいる。「ここは、めだかがたくさんいるし、ホタルの乱舞が見られるんだや。重男君が発見して、そしてここはすごいところだ、というように再認識した。地元のじいちゃん、ばあちゃんたちは長年知らなかったようだな。そしてその様子を見せてみると、じいちゃん、ば

あちゃんたちでもまだまだ感動できるんだなあをつくづく思ったな。」

山内さん、寺内さんらが呼びかけて中年グループによるメダカの保護活動が始まった。水田を干したときメダカが逃げられるようにメダカの増殖池を北の妙の水田に隣接して掘ったのだ。「ちょっとした小さな池だったけど、少人数の人力で結構な労働だったなあ」と関係者たち。だが、翌年、その池の水利組合の工事で水が干上がってしまった。最初の取り組みは失敗に終わった。

(2)角川地区 山里の結びつき豊かさ、そして・・・地域生活と自然環境へ高まる危機感

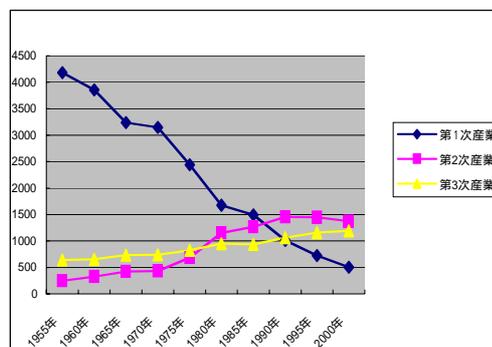
角川地区は、村内でも別格だ。月山へと連なる里山・奥山に囲まれ、溪流角川が点在する小集落を結びつけるように流れている。ここには山村ならではの暮らしと文化と人々のつながりが見られる。集落には農地を持っていない家もあるが、そうした家はかつて炭焼きによって生計を立てていた。昭和30年代までは炭焼きを生業とする家が多くあり、良質の炭を焼く技術を持つ人が今も健在だ。昭和30年代、内閣総理大臣賞を受けた人もいるという。また、「結い」や「講」と呼ばれる集落共同の作業や小規模な集会在数多くある。宗教的なものも含めて細かく数え上げると、かつては年60以上の行事があり、現在も50ぐらいの行事が残っており、集落を基本単位とした農作業や集落運営の相互扶助の社会システムが現在も機能していることを伺わせる。

だが、この地域は、自然災害の歴史を背負ってきた。村内で最も山間地にある角川地区は月山山系の火山灰が堆積した有数の地滑り土砂洪水地帯だった。ここでは昭和30年代と50年代に大規模な土砂洪水が起こった。そこで災害対策のために本流の兩岸をコンクリートで張り、上流部にいくつもの砂防堰堤を建設する大規模な土木事業が行われた。

その結果、地元住民から砂防堰堤に堆積した腐葉土が原因と見られる水質の悪化が指摘されている。また川環境の変化や堰堤が魚類の遡上を妨げ、イワナ、ヤマメ、サクラマス、カニなどがその数を減らし、漁協で大量に放流してもその数を維持できないという。「多額の資金を投入しているのに・・・」漁協関係者は肩を落とす。また、災害対策事業のための工事車両道路が、かえって大量のブナ林を伐採や斜面を掘り込みを招き、「災害対策がかえって土砂崩れの原因となっているのでは」と話す人も山に詳しい地元住民の中にはいる。「おれらが昔やったように川で子ども達を遊ばせたいし、ざっこすめ（魚釣り）させたいけど、川が汚いのが、川好きのおらだにはよく分かるんだ。」地区で子ども達に自然体験をさせたいと願い取り組みを行ってきた斉藤信弥さんは残念そうに語った。

地域集落を維持する不安もある。過疎化、少子高齢化によって同地区は急速にその人口を減らしている。過去40年間で地元中学校の生徒数は約10分の1に減少した。地域に子ども達の声が響かなくなり、しかもテレビゲームなどでも外にも出ない・・・次第に、地域の活気が失われていくことへの危機感が高まっていった。

「地域の本当の良さ、山村で自然や人々の結びつきと接して暮らすことのすばらしさを知らせたい。」地域環境の変貌を目の当たりにして、出て行く人々がちらほらと目立ち、そして子ども達

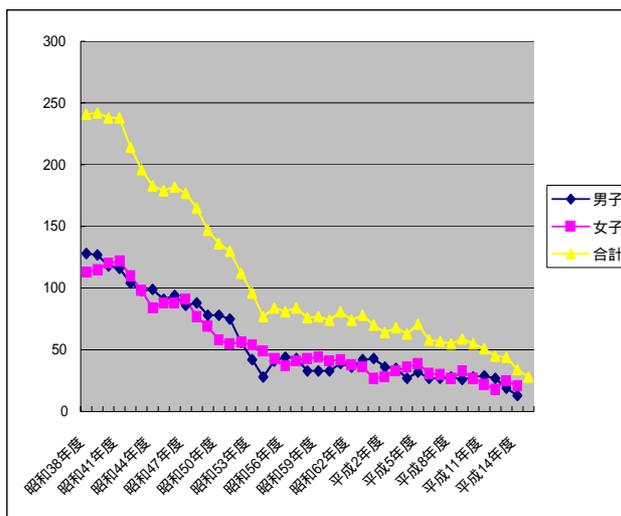


角川中学校生徒数

の数が減少する中で、斎藤さんをはじめ熱い思いをもったおじさん方が動き始めることになる。

角川地区に限らず、戸沢村全体を見回してみても、同じような状況が散見できる。高度経済成長期以降、出稼ぎが始まり、出稼ぎブームの後には近隣の都市部への通勤が始まった。同時に若手人口を中心に村外への流出傾向が強まり、近年の少子化と相まって、全体的な過疎化が進行した。このように生業の場が外に移ることで、地域の自然環境を基盤とした生活の知恵や技術の伝承がなされなくなった。とりわけ農業と地域生活に結びついた里山の利用や保全に関するものにこの傾向が強く、村内でも人の手が入らなくなったことで荒れてしまった里山が散見できる。

農業の効率化や機械化に伴う自然改変や損失の歴史もある。例えば、圃場整備のため土水路がコンクリートのU字溝になったり、川と水路の間に高低差ができたりしてから、それまでは水田の水路でよく見られていたドジョウやナマズが見られなくなったとか、特に昆虫類やメダカ、エビ、カニなどの小動物も、農薬の散布が始まって以来めっきり数を減らしたと地元の農家で当時集落の会長をしていた斎藤久一さんは話す。「本当は、昔のやり方が自然にはよいのだろうが……。馬を使っての耕作や集落のみんなとの田植え、田の草取り、稲刈りは大変だったが、それなりに楽しみもあったんだ。おらだ子どもの頃は田の草取りの頃は田んぼの水路のところまで結構大きな魚が入ってきて、はしゃぎながらそれを追ったものだったよ。」しかし、コンクリート水路と圃場整備、そして農薬の使用は高度産業化社会とそこに生きる人々が求めるものだったのだ。しかし、その結果地域から失われるものも多かった。「今、何かしなければ、このままでは地域に何もなくなってしまわないか。」そんな意識が地域を愛する人々の脳裏に浮かび始めたのだった。



産業別労働人口の推移

4、活動の発端 ……村の面白おじさん連合が立ち上がった！

学校と集落が協働した里地里山活動や地域作りが行われる直接の発端は、前述の寺内恵一さん（現戸沢村共育課長）が社会教育課長として赴任してきた平成6年にさかのぼる。当時学校週5日制に移行される中で、村教育委員会では「地域に根ざした教育をこれから始めるんだ」という方針を打ち出そうとしていた。しかし、こうした方針を行動面で支えることを期待されていた公民館も「最初は討論だけの集団だった」と寺内さんは回想する。社会教育

を地域側で仕掛けることを期待されていた青少年育成村民会議¹も「この当時は名ばかりで年2、3回会報を出してそれで終わりというような代物だった」。

まず、条例を改正して、村民会議メンバーをそれまで8名だったのを12名まで増やした。それも本当に子ども達や地域作りにかかわりを持とうという各集落のおじさん達を中心に集めたという。そこにPTAなども入れ、そして地区会長も巻き込んだ。こうした地区の熱い面白おじさん達が連合し組織だって活動する地盤が出来上がった。地域で子ども達を育てるといふ方針で具体的にできることから実行した。「今何をすべきか、今度は何をするかということ『信弥君、角川で何ができるべか、重男君、古口で今度何をすんべか』と飲みながらみんなで語り合ったな。そして少しずつできることから積み上げていった成果は大きかったべなあ。」最初は地域リーダー養成講座ということで、実際に子ども達に活動を通してかかわれるようにということで地域の素材を活用した遊びやもの作りなどを学ぶことからはじまった。「まずは、中年おじさん達が子ども達のために手に職を付けることからはじめていったんだよな」と語る。

5、地域・行政・学校との連携への模索

戸沢村教育委員会社会教育課は、当時行政としては理想的な動きをしたとあってよい。地域住民の願いや動きを組織化し、それを学校や県の事業を引き入れたり、他部局の事業さえも引き入れたり住民が活動しやすいような結び目をいくつも作って行くのである。社会教育課長（当時）の寺内さんは「行政で企画書だけどんなに立派なものを作っても駄目だべ。実際に住民がどう活動し、それをどう次につなげて行けるかが重要。走りながら考え、模索して住民の手作りでやって行くことが基本だべや」と話す。

まず、行政の社会教育課と地域集落の青少年育成村民会議員が連動しつつ、地域に根ざした社会教育活動が行われるための下地が作られた。そして、学校と地域とが連携して地域ぐるみで子ども達を育てるため、学校指導主事と社会教育主事を融合させた学社融合主事がおかれ、学校教育と社会教育との調整に柔軟に対応できるよう配置された。

そして、平成11年度には山形県の事業「地域の学校づくり」のモデル指定を村内の中学校で受け、翌年は村内のすべての学校区に「地域の学校づくり推進委員会」を立ち上げ、広範囲の住民と学校が連携して、地域ぐるみで教育活動を行おうという動きを作り上げた。その時、村民会議のメンバーが、地域と学校で様々な取り組みの仕掛け人として活躍していくこととなる。当初の活動の中心は、地元で伝わる藁細工、夏祭りなどの踊りの指導、農作業体験活動など、いわゆる地域の生活文化の継承活動だった。後述するが、この活動の中で、古口小学校区の子供達との学習の楽しさを知ったお年寄り達が、もの作りの老人団体「古口乙夜塾」を結成した。「子ども達のためにというよりは、自分達老人自身が楽しんでいる。元気になるきっかけの一つになった。地域が明るくなった」そして、「組織の構成や規約作りには専念するのではなく、実際に住民、お年寄りや子ども達が動くことだ」と老人たちは生き生きと話してくれた。

¹ 推進委員幹事で構成。地域の集落で暮らす村民がメンバーとなっている。

6、とざわ里地塾の開催

このような活動が展開する中で、自然保護や自然体験活動に詳しい斎藤正昭先生が戸沢小学校に赴任して来た。彼は以前に東京の環境NGOとのつながりを持っていた。そのつながりを利用して環境NGOの事務局長を講師として招くことになり、地元学²を村民フォーラムで講演してもらった。外部者の影響も受け、またふるさと学習本の取材の話もあり、これを機会に（チャンスを柔軟に生かすのがこの村の特徴だ）里地里山の自然や文化に根ざした地域学習を行おうと「とざわ里地塾」が企画された。村内の4つの小学校（または小中学校）区で、それぞれ1回、春、夏、秋、冬と計4回行われた、各々の地域特性（自然・生活文化・人）を生かしたものだ。地域の自然や文化を体験しながら学ぶという趣旨のもので、次のようなプログラムが実施された。メニューの豊富さにはちょっとびっくりさせられる。これら地域に密着したプログラムを動かすのに暗躍したのは村民会議の地元の面白おじさん達、寺内さん、巻き込まれた老人たち、そして山内さんら地元農家の面々だった。

古口小学校区（2002年8月）

1日目：メダカの学校（増殖池）・水田・水路の水辺の生き物観察、環境マップ作り

2日目：炭焼き体験、炭細工作り

戸沢小学校区（2002年10月）

1日目：鮭漁体験、もの作り塾

2日目：炭焼き細工作り

角川小中学校区（2003年2月）

冬の里山観察会、冬の昔遊び体験塾、わら細工作り、民話を聞く会

神田小学校区（2003年5月）

山菜取り体験、川遊び体験

2ヵ年度にわたる継続的な取り組みの結果は大きかった。地域の自然環境や里地里山に根ざした生活文化に対する関心の高まり、地域の再評価や地域内での子供・大人・老年世代間のコミュニケーションや双方向の学びが活性化されることになったという。「あそこのじいさま、あんなことができたのか」「あのばあさま、こんなこと知っていたのか」「なんもねえ村と思っていたけど、こんなすごいものがあつたのか」集落内での人々の動きが出てきたのである。



雪の里山で遊び（とざわ里地塾）

7、地域の「学校」「塾」の活躍 北の妙創郷大学の結成と地域活動団体

2004年度、戸沢村教育委員会は学校教育課と社会教育課が一元化され共育課となった。「共育」というのは、子ども達だけではなく、こうした前述の地域の学校づくりの取り組みに、

² 地元学とは、地元で学ぶこと。自分たちが暮らす地域のことをヨソモン（外部者）の目を借りて一緒に歩き調べる。そのことで、普段は当たり前すぎて気がつかなかった新しい発見がある。見つけたことを地域で話し合い、これからの地域づくりを自分たちで考える、きっかけ作りが地元学である。水俣市における環境と地域を主体にした地域づくりから始まった手法で、現在、農山村を中心とした住民参画型の地域作りで行われるところが多くなった。

地域住民も学校の先生も行政も共にかかわり、共に育み育まれるということを意味している。そのような趣旨で行政機構改革が行われたのも、地域に「共育」を進めようと村内各地域にそれぞれの独自性をもった「地域教育活動団体」が誕生していったからだ。「子ども達におらだがこれまで培ってきた知恵や技術を教えることで逆にパワーをもらった。そして、おらだでもなんかしてみっぺ、ということで立ち上がったんだ」と「古口乙夜塾」もの作りの老人団体が結成された。この乙夜塾とメダカの保全を願うおじさん達が協働し、住民が巻き込まれ、炭焼き窯、メダカ・ホタルの増殖活動、田んぼの活動、小牧場が、北の妙に作られることになる。

先にも触れたように、「北の妙」では、それまで地元の専業農家である山内重男さんらを中心として小規模なメダカの保護活動がはじめられていた。しかし地域の協力体制や行政の支援体制があまり構築されていなかったことも災いして必ずしもうまくいかなかった。だが、今、北の妙には長さ 150m にわたる大規模なメダカ増殖池を住民パワーで作りに上げられている。それは、行政の寺内さんの調整によって県の助成で活動資金を得ることができ、さらに地域で活動をはじめていた老人団体「古口乙夜塾」のメンバーや教育委員会を中心とする行政職員が加わって住民のボランティアが募られ大きな力となったからだ。

現在メダカの学校（メダカ増殖池）では順調にメダカの増殖が進んでいる。この古口地区北の妙は、地区内でも指折りの湿田で、圃場整備も入っていない昔ながらの水田景観が残るところである。山内さんは「こうした昔ながらの景観を楽しみながら、今ではすっかり見かけることが少なくなってしまったメダカの増殖の取り組み続けていきたい」とこれからの意気込みを語る。ちょうど時を同じくして彼はここでホタルの乱舞を見た。それがきっかけとなって 2004 年からは子ども達とともに、ホタルの増殖活動にも取り組みも始まった。子ども達と米作りを行う「田んぼの学校」もここを舞台にして行われている。活動の輪は確実に広がっている。北の妙を訪れると、文字通りメダカがたくさん生息しており、明らかに増殖活動の成果が出ていることがわかる。その近くでは乙夜塾の老人達が昔ながらの炭焼き小屋の屋根掛けをし、炭焼き窯に火を入れていた。その周辺では、おじさん達が休日を利用してたまった泥を出したりカタクリのやりしたペースだが、自分達の手で確実に創っていく活動に充実感を抱いているようだ。休日には子ども達が遊ぶ姿がいつも見ることができる。山内さんら北の妙グループの長年の悲願は住民みんながかかわることによってついに達成されたのである。



<メダカの学校・橋などは住民の手作り>

2004 年の秋の学習会の際には、メダカだけでなく絶滅危惧種に指定されているホトケドジョウも発見された。メダカの学校ができてから 3 年目、明らかに生物多様性があがっており、日々進化しているのが見受けられる。寺内さんはこれらの取り組みを「北の妙創郷大学」と名づけた。

その他に村内には農業体験活動、自然保護、体験などを行う「蔵岡ふるさと塾」、「神田妙見塾」、「松坂自然塾」、「南部里地探検隊」などが続々とできた。それぞれ地域住民が自分達の手で活動を進めている。2004 年にはそれら団体をネットワークする「自然保護推進ネット

とざわ」も結成されている（本稿末の資料1参照）。

8、地元学から始まる住民の地域再生活動 山村小集落の挑戦・角川里の自然環境学校

先に触れたように、角川地区は村内でもっとも山間部に位置し、人口も1200人足らず、村民の5分の1にも満たない小さな地区だ。経済的にも地勢的にももっとも恵まれない地区と言える。この地区では青少年育成村民会議のメンバーであり角川小中学校PTA会長（当時）であった齋藤信弥さんは南部里地探検隊を結成し、ギフチョウなど稀少動物の保護を中心に子ども達に対する環境教育のイベント活動を行った。同じく村民会議メンバーの田中悦夫さんが地域住民と学校関係者で構成される角川ふるさと委員会³の委員長（当時）として中核となり、学校と地域が連携した地域学習を進めてきた。田中さんは「自分達は必ずしもこうした農山村の知恵や技術を伝承してこなかった」という反省をもっているという。齋藤さんは「子ども達にこうしたものを受け継がせていくこと、農山村での原体験をさせることが、ここで生まれ育った子ども達にとっては、将来大きな自信になるのでは」と話す。角川地区から村民会議メンバーとして選出されている2人はツーカーの仲だ。これに戸沢村の里地里山活動や環境教育の取り組みを学びたいと学生（筆者）が住み込んだことを契機にして、新たな動きが起こった。

それまでの角川地区の取り組みには、なかなか乗り越えられない課題があった。それは活動が単発的で一部の参入に終わってしまい、一部の「物好きサークル」の一過性のイベントに終始することが多かったのだ。齋藤さんは次のように言う。「どんなに俺らががんばっても、それをやって一体何になるんだ、どうなるんだ、と周りから言われてしまうんだね。どうしてもメンバーがいつも同じになってしまっていて、運動が広がらないんだ。本当は地域の子ども達を地域のみinnで共通の体験を通して意識を持って育てていきたいんだが・・・、そのことは子ども達にとってとても大切なことだと思うのだが・・・。」そうした中、村を訪れていた筆者が2002年、齋藤さんの積極的な勧誘もあり、住み込んで調査活動を行うことになった。だが、一人の研究者の力には限界がある。筆者は地元の住民が集落や周辺の里山、川を一緒に回って「地域のあるもの探し（地元学）」をしようと、齋藤信弥さんや地元農家で地区会長を務めていた齋藤久一さんに求めた。もともと地域の自然や文化伝承活動に積極的だった彼らは地区の中心集落の住民に声かけをして、地域のあるもの探し、地元学が行われることになったのである。この結果、地域に新しい大掛かりな動きが起こった。そして地区会長の齋藤久一さんが次のような呼びかけを地域に行ったのだ

「都市化社会の中で、近年角川地区においても、子供たちへ里の自然環境や文化など、本当に人間らしく生きるための知恵や技術を伝えるということが求められています。先日、下本郷部落において『地元学』という手法を用いて、周辺の里山、川、集落内を住民や外部から訪れた方々と一緒に歩いて調べてみました。その結果、極めて豊かな自然環境や生活のさまざまな知恵や技術、文化が角川にも数多く存在することが明らかになりました。しかしながら同時に、それらの文化が受け継がれないまま廃れようとしている実態も分かりました。こうした状況は角川を愛する者として寂しい限りです。こうした状況をかんがみて、角川の

³ 地域住民と学校関係者で構成する。学校評議委員会の機能を持つと同時に、地域学習の調整を行う機能をもっている。

住民が一致団結して、子供たちに地域の自然環境や生活文化を伝えるメッセージを発する必要があるのではないか、そのために地元住民を主体として子供たちに地域の里の自然や生活の知恵や技術を伝える場をつくろうとする声が起こり始めております。そしてそのような知恵や技術、文化を持っておられる方々を広く募る必要が出ております。今回の集会ではこの点を中心に、角川を愛し、地域作りに日々取り組んでおられる各部落の会長の声がけをお願いしたい旨、話し合いたいと思います。」

1ヵ月後、約100名の有志によって「角川里の自然環境学校」が設立された（現在180名に増えている）。この「学校」は地域住民の運営によって活動が行われる。資金源は基本的にはないので、地域資源を活用した住民の手作りの活動が主なものになる。地域住民がそれぞれ、山の学校、川の学校、食の教室、農の学校、もの作り塾、民話・昔遊び塾など得意な分野に登録し、自らが先生役となった。みんなが主体となる自覚の下で、里山の観察会や川の観察会、郷土食講習会、もの作り塾などが行われている。特にそれまで活動から周辺化されがちだった女性達を中心となって食の教室が結成されたことは注目される。地域の女性達による里地里山の資源を活用した郷土食の知恵は、消費生活の便利さにのみに慣れた若手のお母さん方の意識をも変えつつある。

子ども達との環境教育活動の中では、地域の里山の荒廃や、川の水質の悪化、かつてとは違う水田環境、もの作りの材料として必要な藁がとれない機械化された農作業行程など、地域を取り巻く様々な状況に住民自身が深く気が付くようになる。こうした「気づき」を元にして、活動は集落の住民がそれぞれのやり方で参加し計画される。それは子ども達への地域学習、そして手作りの自然再生活動へと向かおうとするものだった。

9、最新の状況～外部との協働、より普遍的なメッセージへ～

このように、戸沢村では、農山村地域に伝わる里山・里地・里川に関係する知恵や技術を子どもたちに継承する取り組みが始まった。住民が一体となった活動には、地域の小中学校と密接に連携しながら、教育委員会との協議を保ち、住民による地域経営と役場の目指す社会教育、学校のめざす学校教育というそれぞれの分野において、大胆な活動展開が見られた。それぞれの取り組みは、各主体ごとの目的にかなっているが、全体を見渡したときには、自然の復元活動、文化の継承活動、農林業の担い手育成、さらに地域産品開発というように多面的な地域再生の取り組みとして見えてくるのが最大の特徴だ。キャッチフレーズは「農山村の子ども達に地域の自然や文化のすばらしさを伝えること」だ。それは単に昔を踏襲することではなく、新しい将来ビジョンを作ることにつながっている。教育委員会の寺内さんは（現共育課長）は次のように語る。「これからの時代、こうした農山村の住民こそが、先進的なライフスタイルを提示できるんでねえべか。だからこそ、こうした活動の中で、まずはその地域の住民の価値観が変革されていくことが重要だべや。」

こうした想いをより様々な人々と共有していこうという動きも出ている。村内最奥部の角川地区では地区を越えて活動を共有しようとしている。「ここでの学習は、地域の子供達だけではなく、こうした体験に恵まれない全国の子供達にとって、あるいは大人たちにとっても大切な体験を提示できるんでねえべか。そしてそれは全国の同じような農山村を勇気付ける取り組みとなるかもしれねえ、がんばんねば。」地元農家の斎藤久一さんは語る。斎藤さんは73歳、その次の世代は田中悦夫さん53歳、斎藤信弥さん49歳、そしてその下の30

代、20代にも中心となって取り組む人たちが出てきた。

地域の小さな取り組みは、より普遍性を帯びて広がる新たな動きとなろうとしている、自分達の手で確かな感触を楽しみながら。

第2章

渡り鳥と農業の共生を目指した自然再生～宮城県田尻町・蕪栗沼と周辺の水田湿地～

1、蕪栗沼 みちのくの米所、そして自然の宝庫

東北本線を北上し仙台の街を過ぎると小丘陵の続く山間地に入る。そこを抜けると一気に視界が開ける。まるで地平線が見えるかの広さで水田が続く。宮城県北部、みちのくの米所、仙台平野だ。ここからササニシキをはじめ、人気のブランド米が東京をはじめ全国の人々の口に運ばれる。

伊達政宗の時代から今に至るまで重要な食糧生産の場であるここは、河道の目まぐるしい変遷が見られるが、それは稲作生産を効率的に行おうということと関係している。そして水田一枚の大きさは驚くほど大きい。いかにして米を効率よく増産しようとしたか、その努力が土地に刻み込まれた一帯であり、人の手が加わって作られた自然だ。この水田地帯の中央を流れる迫川流域はその約30%が農地として利用されている。これは県全体の水田面積の約4分の1にあたり、県下でも有数の水田稲作地帯だ。

そんな穀倉地帯の中核に蕪栗沼はある。周囲を迫川・旧迫川に囲まれた、貴重な水棲生物や水生植物が棲息する自然の宝庫だ。有名なラムサール登録地伊豆沼からは南方8キロ、伊豆沼とともに雁などの渡り鳥の有数の飛来地となっている。伊豆沼と違うのは周囲に何も建物がない、道もあるが整備されていない、普通の農業用道路だということだ。仰々しい看板もない。私は最初たどり着くまでによほど苦労した。素晴らしい自然だからこそ、観光地化するのではなく、「そのままに」保全しようという意識が見てとれる。

日本雁を保護する会の呉地正行さんは次のように語る「伊豆沼はラムサール条約の指定を受けたということでよかった面もあるが、観光的な箱物の建造、地元住民の理解や意識を得ないままに進んでしまった、という反省点がある。観光地化が我々の目的ではないのだから」彼はもっと大きな理想郷抱いていたのだった。

2、蕪栗沼の誕生と改変・損失の歴史

蕪栗沼周辺の農村地域は江戸時代から東北地方でも有数の穀倉地帯だった。穀物搬送のため北上川の河道の開削による河道の移動工事や河川改修など、幾度となく行われてきた。古くは伊達政宗の時代までさかのぼるといふ。そのことで旧河道跡地には沼や湿地帯が残存することになった。その一つが蕪栗沼だ。かつてこのような沼が40程も存在しており、雁の飛来地となっていた。現在も6つの沼が存在しているが、いずれも規模が縮小したものとなっている。そのなかでも特に初期の段階からその姿をとどめているのが蕪栗沼である。

だが、蕪栗沼を囲む一帯は洪水の常襲地で、隣接する白鳥地区をはじめ、4つの地区と蕪

栗沼は、周辺の水田を守るための遊水池機能を果たしていた。迫川流域は生産基盤の条件整備のため開発が必要だとされ、明治44年に北上川の河川改修を皮切りに、昭和初期まで工事が行われた。この結果、洪水の常襲地であった周辺の開発が可能になると同時に、後背湿地も水田に転換され、400ヘクタールあった沼の面積も100ヘクタールにまで狭められた。このような河川改修や河道の開削工事、水田への転換などによって40ほどあった沼や湿地はほとんどその姿を消した。

迫川河道変遷図 (迫町史より)



①慶長9年までの流路図 (1604)
江合川は独立河川でした



①相模土手、安場の曲袋 慶長10年伊達宗直による改修13年完成 (1605~1608)
②14年~15年登米~柳津間の改修 (1609~1610)
③迫川は独立河川になった。



①元和2年江合川と迫川を合流 (1616)(短台地峡の開削)
②元和3年~6年 (1617~1620) 柳津~猪岡短台開削
麻崎村小麻に締切堤防を築く
③神取山を迂回する河道の掘削 (人口狭窄部をつくる)



①元和9~寛永3年 (1623~1626) 第3次改修
②北上川開削 (明44~昭和9年) (1911~1934)

(出典・宮城県迫川総合開発建設事務所「蕪栗沼遊水池」)

さらに減反政策以降、耕作水田が徐々に減ってきたことと相まって、渡り鳥のねぐら、採草地の両方が減ることとなった。その結果、雁をはじめとする渡り鳥の行き場が徐々に消滅していくことになったのである。

3、蕪栗沼全面浚渫計画と保全運動の始まり

当初のままの姿を残す数少ない蕪栗沼は、自然保護活動家などの働きかけもあって、しばしば保全へ向けた動きを繰り返してきた。しかしその度ごと地元農家の反対があって、不調に終わるという経緯を繰り返していたのである。地元農家にとっては、鳥は稲に害を与える害鳥だという認識が強かったからだ。沼地の数や面積が減少するにつれ、渡り鳥が蕪栗沼には集中して大量に飛来するようになる。それらの鳥の大群から受ける印象は自然保護家と農家の間では相当のイメージの違いがあったようだ。私がこの地域を訪れた際も、未だに地元農家と環境保護家との間での意識の溝は、「消えつつあるが・・・、完全になくなったわけではない」と、蕪栗沼の保全に携わる村の担当職員は話す。このように保全へ向けた動きがあったものの「人か鳥か」の世論に押され、保護区指定になるには至らなかった。

現在の蕪栗沼の保全、再生の取り組みにつながる直接のきっかけは、平成8年度に蕪栗沼が、遊水池確保のために全面浚渫されることが明らかになったことから始まる。沼が全面浚渫されることになれば、蕪栗沼の豊かな湿地景観が失われるだけでなく、現在の沼環境によって生息している多種多様な生物が、その存在を知られることもなく消滅することになる。そこで自然保護団体と地元農業者の一部が反対し、専門家や議員も交えて、「蕪栗沼探検隊」の集いを実施された。その結果、レッドデータブックに記載されているゼニタナゴなどの稀少生物の存在や豊かな生物層と湿地環境が確認された。

その後、地元小学校を中心に環境教育・啓発活動を地道に行いつつ、議会でも訴え、ついに浚渫撤回を勝ち取った。現在、治水、自然、農業の共生を目指して取り組みが進んでいる。たとえば、「蕪栗沼探検隊」を前進とする「蕪栗ぬまっこくらぶ」などのNPO組織による啓発と保全活動、同時並行的に展開する農業分野での冬期湛水水田の取り組み、そして沼と周辺の水田をラムサール登録する動きである。教科書的には以上の経緯をたどるのだが、しかしそこに行き着くまでには、多種多様な人々のドラマがあったのである。

4、運動の高まり・自然保護家と地元農家との出会い

日本雁を保護する会の会長、呉地正行さんは、ラムサール登録地、伊豆沼にほど近い若柳町に在住している。調査研究、保護、広報教育の3つを軸にして幅広く活動を展開している。私が訪れると気さくに自分の研究成果や子ども達への環境教育の教材を見せてくれた。その数は驚くほど多くそして親しみやすい。呉地さんが語る話は専門的であるにもかかわらず、わかりやすいものなのだ。地元の子供達やこうしたことに関心を抱いてこなかった大人達に目を向けてもらうための環境教育の取り組みを進めていく中でこのような語りを作ってきたのだろう。鳥や自然を題材にした遊びの要素を含めた観察方法、例えば同種類の鳥の顔にも様々なパターンがあるなど、とても面白い話を聞かせていただいた。「広く人々に知られるようになり、ファンを増やしていくことも重要なんだ。いろんな人が関心を持って係わることが重要。生物多様性ならぬ『人間多様性』がこういう保全活動にとっては重要だね。」と彼の運動家としての顔も見え隠れする。

そんな彼の長年にわたる研究調査活動の結果、伊豆沼を中心に分布する宮城県北部でのマガンの個体数が 1971/72 のシーズンは 3000 羽ほどであったものが、1990/91 には 20000 羽、さらに 1997/98 には 60000 羽を超えるなど急激に増加していることが明らかになった。呉地さんの分析によると、問題の核心は個体数の増加に対して越冬地がほとんど増加していないということ。伊豆沼への一極集中は、食害鳥として認識を持っている地元農家との軋轢を強めると共に、雁の密度が増大するために伝染病がまん延して大量死を引き起こす可能性を高める。そこで雁を保護する会としては、伊豆沼より南方 8 キロにある蕪栗沼を保護区として分散先にすることを目指していた。しかし、沼は保護区としての指定を受けておらず、ハンターがうろつくこともあり、雁の定着が悪かった⁴。

一方、蕪栗沼に隣接する白鳥地区では、千葉俊郎さんが農業を営んでいた。彼は水田農業を営み、白鳥地区土地改良区理事長を務めていた。長崎五島列島出身、農業をやろうと東北に来た。私が作業小屋を訪れるとバンダナを巻いたおしゃれな身なりをした千葉さんは、こう話してくれた。「おれは自分の考える農業をしたくて東北に来たんだ」と。そして、「ヨソモン」でありながら、若いときから農業者のリーダーとして活躍してきた。「ここ田尻町は、ヨソモンでしかも若くても、代表格で活躍する場を与えられるということがよくあったな。そういう土地柄なんだな。」このことは、後に見る蕪栗沼の保全に係わって外部から様々な若者たちが入ってきたとき、町が彼らを受け入れた際の身振りや通底するものがある。だが、当初、彼は環境保護のことなどまったく考えていなかった。

話は前後する。

昭和 48 年、彼の元には、一通の文書が届いていた。それは蕪栗沼とともに白鳥地区を完全に遊水池として使用するため、耕作の占有許可を取り消すという旨の通知文書だった。しかし、白鳥地区は一般の農地と違い、河川敷として管理されていたため補償金は一切出ない。そこで千葉さんが組合の代表となり、農地の払い下げ運動を開始した。だが、1990 年前後には白鳥地区の冠水頻度がほぼ毎年になってきたこともあって、払い下げをあきらめて補償金の獲得へと活動のターゲットが移っていたのである。しかし、補償金の獲得は容易ではなく、1996 年の段階でも目途が付いていなかった。

このような中で、呉地さんと千葉さんが出会う。それは雁の保護活動と地元の選挙活動とで両方を知っていた地元議員の縁者が仲立ちをした結果だった。千葉さんは、呉地さんの自然保護論を支える世界観の壮大さと信念を持って話す人柄に感銘を受けた。彼はこう語る。「いやあ、実は、俺は本来、呉地のような学者顔な奴は嫌いなタイプなんだよ。けど呉地の世界観には驚かされたね、世界の見方が変わった。そして・・・自分達の言っていることがひどく小さいもののように思われたんだよ。それに、俺らは農業と環境保護とのかかわりなんか最初まったく考えていなかった。しかし、俺らの農業が環境の保全と深く係わっていること、そしてそれを保護することが、農業のためにもプラスになるということがわかったんだな。本当に目から鱗というやつだったよ。」

このように沼と渡り鳥の保全だけでなく、雁が来ることを利用して付加価値を付けた米を生産し農業経営にも一躍を担えるといった沼の活用の将来像を指し示されたことで、千葉さ

⁴ 参考：村上悟 2001 『多主体参加による地域環境の持続的な利用・管理システムとしての演劇型地域経営に関する研究』

んは呉地さんに協力することを決めた。そして平成9年、ついに白鳥地区耕作者への補償金問題も解決、正式に蕪栗沼の一部となることが決まり、沼の面積は1.5倍となった。

現在、千葉さんは蕪栗沼の再生事業の中核の一躍を担っている。地元の農家代表として蕪栗沼の保全関係で地域に入ってくる若者達の親分役で様々な便宜を図ったり、行政への働きかけを地道に行ったりなど積極的に行動してきた。彼は蕪栗沼を真に地域に根ざしたものにしようとしている。自身が音頭をとって湿地化した白鳥地区に関しては、「自然保護の観点からも、ここ数年で非常に面白い展開になったんだなあ」とうれしそうに話していた。自然保護家と地元農業者のリーダーが、単なる議論だけでなく、共同して確実に行動することで蕪栗沼の取り組みを支えているのだ。

研究者代表としては地元田尻高校教諭の岩淵成紀が堅実な研究を積み重ねている。彼の活動は、研究を自分の学術世界にだけにとどまらない。積極的に政策提言したり、活動に入ったりして幅広い活動を展開し、研究者同士のネットワークを広げており、地元の取り組みに対して科学的根拠を与えようとしている。

呉地さんが語っていた『人間多様性』は着実に増加していったのである。



蕪栗沼周辺部全景・蕪栗沼のすぐ手前が白鳥地区。現在は完全に沼になっている。

5、保全活動展開と「人間多様性」の増加～環境教育の展開と地元意識の変化・

若手の活動家の存在も活動の始まりを支えていた。蕪栗沼探検隊を前身とする NPO 法人「蕪栗ぬまっこくらぶ」事務局の戸島潤さんや鈴木幸平さんなど、当時まだ 20 代だった若手のメンバーの活躍だ。特に地元小学校への蕪栗沼を題材とする彼らの環境教育・啓発活動の効果は大きかった。これによって子ども達だけでなく、その親世代や祖父母世代が、子ども達の話の聞いて沼や鳥に対する認識を変えたという。だからこそ、「今は、沼の保全や鳥の保護に対する表立った反対運動は見られなくなった」と蕪栗ぬまっこくらぶのメンバーは話す。

このような若手の人材を受け入れる地元農家の千葉さんの力は大きかった。また、行政のサポートも大きかった。当時田尻町長の峯浦耘蔵さんは、ヨソモンの人材、特に若手の人材を積極的に地域に受け入れてきた。峯裏さんは次のように話す。「地元住民は地元の自然や文化の価値になかなか気づけないもの。だから、それらを守っていこうという行動も意識も起きないし、実際に行動していくための手法も持っていない。だからヨソモンを受け入れて、彼らが自由に活躍できるスペースをつくり、彼らの力やノウハウを活用して、取り組みを進めていこうとした。彼らヨソモンの参加者から様々なことを教えてもらったよ。」

2004 年 4 月には、保全団体のメンバーであり、ヨソモン参加者であった蕪栗ぬまっこくらぶの鈴木幸平さんが農政商工課に臨時職員（地元では親しみを込めて通称「蕪栗室」と呼ばれている）として採用された。呉地さんはこのように多様なヨソモンを受け入れたら、活動しやすい状況を整えたりするといった、生物多様性ならぬ「人間多様性」を保持する社会環境が大切だと力説しているのだ。田尻町のスタンスはまさに自然再生活動にはこのような「人間多様性」を作り出すことの重要性を筆者に強く感じさせるものだった。

こうした多様性に満ちた市民の活動に裏打ちされながら、マスコミに効果的に情報を流したり、政治家に働きかけたりなど、努力を行った。

このような活動の結果、蕪栗沼の全面浚渫が撤回されることとなったのである。

6、現在の自然再生の取り組み

現在、蕪栗沼の保全活動は市民団体、行政、研究者といった 3 者がネットワークを広げつつ、より高い理想に向けて展開しようとしている。

(1) 市民団体の活動 蕪栗ぬまっこくらぶの取り組み

先に見たように、「蕪栗ぬまっこくらぶ」は浚渫工事を契機として展開した保全運動の中で設立された。会の前身は、蕪栗沼をまず多くの人に知ってもらおうと呉地さんの呼びかけで結成された蕪栗沼探検隊である。以来、この団体は着実に会員を増やしており、現在約 100 名の会員を持っている。活動の内容は、蕪栗沼の自然を活用した環境教育、動植物のモニタリング調査、治水や農業や地域振興などの分野で沼の自然を生かすための提言や提案、ゼリタナゴやマガンなど絶滅の恐れがある貴重な動植物の調査や増殖活動などだ。

また、蕪栗沼では生活排水が原因と見られる富栄養化した土砂が流入している。そのため泥の堆積とヨシの繁茂によって陸地化が進行し蕪栗沼を保全する上で大きな問題となっている。ぬまっこクラブでは、支援金を募って陸地化の防止や移入種の侵入など人為的な環境悪化の改善を目指している。

また、冬期湛水田は町の農政商工課が中心となって助成金制度や、鳥の食害保障条例を整備するなどしている。外部から参入してきた自然保護家が活躍しやすい環境を提供し、外部参入者を受け入れ、逆にそれらの人々を中核としながら活動が運営されている。

蕪栗沼やその隣接地である白鳥地区は、渡り鳥が戻り、目に見えた成果が上がっているという。白鳥地区は沼に戻したその年から鳥が集まるようになった。現在2万羽の雁のねぐらとなっているという。一方で生物多様性では減少傾向も指摘される。「大量の鳥の飛来のため、生物多様性は減少している面もある」(蕪栗ぬまっこくらぶ事務局・戸島潤さん)という。特に鳥の食草であるマコモの減少は激しく、マコモの増殖を目指すマコモサポーターなるものが蕪栗ぬまっこくらぶにはある。

上写真はゼニタナゴの増殖池の手入れをする戸島さんの写真(文章横に挿入)



陸地化の進む蕪栗沼 水の向こう側に見えるのがヨシ帯でこの刈り取り作業が沼の保全に必要なのだという。

(2) 行政サポートと冬期湛水田の広がり～「環境共生型」の新しい農業へ～

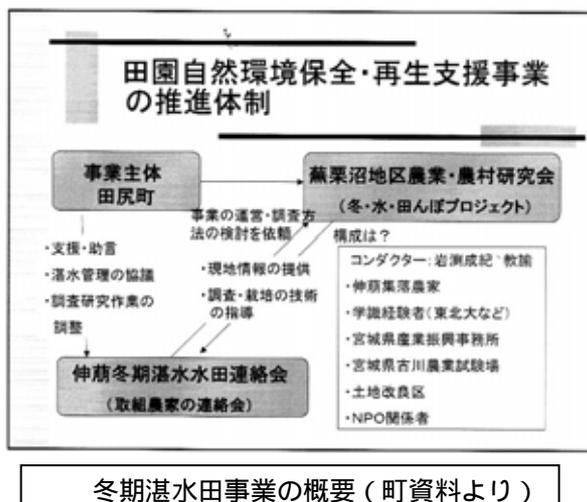
村の農政商工課でも新たな動きが出ている。沼を取り巻く周辺の水田の冬期湛水田化の計画(地元ではもう少し柔らかい表現で「冬水田んぼ」と呼んでいる)である。これは雁など

渡り鳥にえさ場を提供するという効果だけが期待されているのではない。農業面でのメリットも期待されている。例えば、減農薬を可能にしたり、雑草が増えにくくなったり、鳥の糞が肥料になったりするのではないかなど、土壌に及ぼす好影響が期待されている。しかし、科学的裏付けとなるデータはまだ出ていない。そこで今年度研究者とタイアップしながら本格的な調査するという。

蕪栗沼の南に隣接する集落では 2004 年度 12 名がこの「冬水田んぼ」を行った。また行政側ではこうした取り組みに一反歩あたり 1 万円の助成金を出すことにしている。

こうした取り組みの背景には農家や役場の農政商工課としても害鳥としての鳥ではなく、鳥を一つのシンボルとして、この地域にしかできない付加価値の高い、環境に優しい、環境共存型の米作りをし、販売していこうという経済的思惑がある。

また、教育委員会の松力根典雄さんは、このようにして環境保護・保全の先進地として活躍できる場を数多く作り出し、環境教育を受けた子ども達が、将来地域に残っていけるようなサポートが重要だとも話している。



（3）研究者の活動の展開～研究活動と保全運動とのタイアップを目指して～

現田尻高校教諭の岩淵成紀さんと日本雁を保護する会の呉地さんなどを中心となって地元で根ざした研究活動が進んでいる。彼らは同時に東北大や宮城教育大などの学術機関や全国で実践活動をしている農業研究者等の広範なネットワークを築こうとしている。特に冬期湛水田の効果に関しては、科学的根拠がまだ未知数であるため、地元農家と共同しながら広範囲の水田で調査を行おうとしている。これまで研究者は調査するだけという役割にとどまることが多かった。だが、地元で根ざした地道な調査活動を続ける彼等は、農業や環境保全に対する政策提言（これは市町村レベルから国レベルまでを視野に入れている）も行っている。彼らの活動範囲は自然環境だけではない。地元の文化財の保護運動なども行っている。

7、自然保護と農業との共生を目指して

このように渡り鳥の保護、蕪栗沼の保全から始まった自然再生活動は、環境保護と農業振興の観点の2つが交差して展開してきた。整理すると次のようになる。

（1）自然保護の観点から

- ・耕作放棄値や水田を利用して各地に渡り鳥のねぐらをつくり、渡り鳥の集中の緩和と分散を目指す。
- ・水辺に生息する希少種の保護と保全。
- ・水田農業の多面的機能についての啓発と発信活動。並行して蕪栗沼の自然を生かした環境教育を推進し、地域で自律的に環境活動ができる人材を育成する。
- ・「持続的に生きる」ことができる農村モデルの創出。

(2) 農業振興の観点から

- ・ 「環境共存型農業で『売れる米作り』」を目指す。
- ・ 渡り鳥を害鳥としてではなく、環境保全型農業の安全安心な稲作作りのシンボルとして活用したブランド米「はつかり米」を生産し、地域の農業振興に役立てる。
- ・ 伊豆沼・蕪栗沼のエリアより仙台市まで拠点となる湿地や冬期湛水田を保全・整備し、雁が一極集中することなく、飛来できるようにする。
- ・ 広範囲の環境共存型の水田農業を目指す。

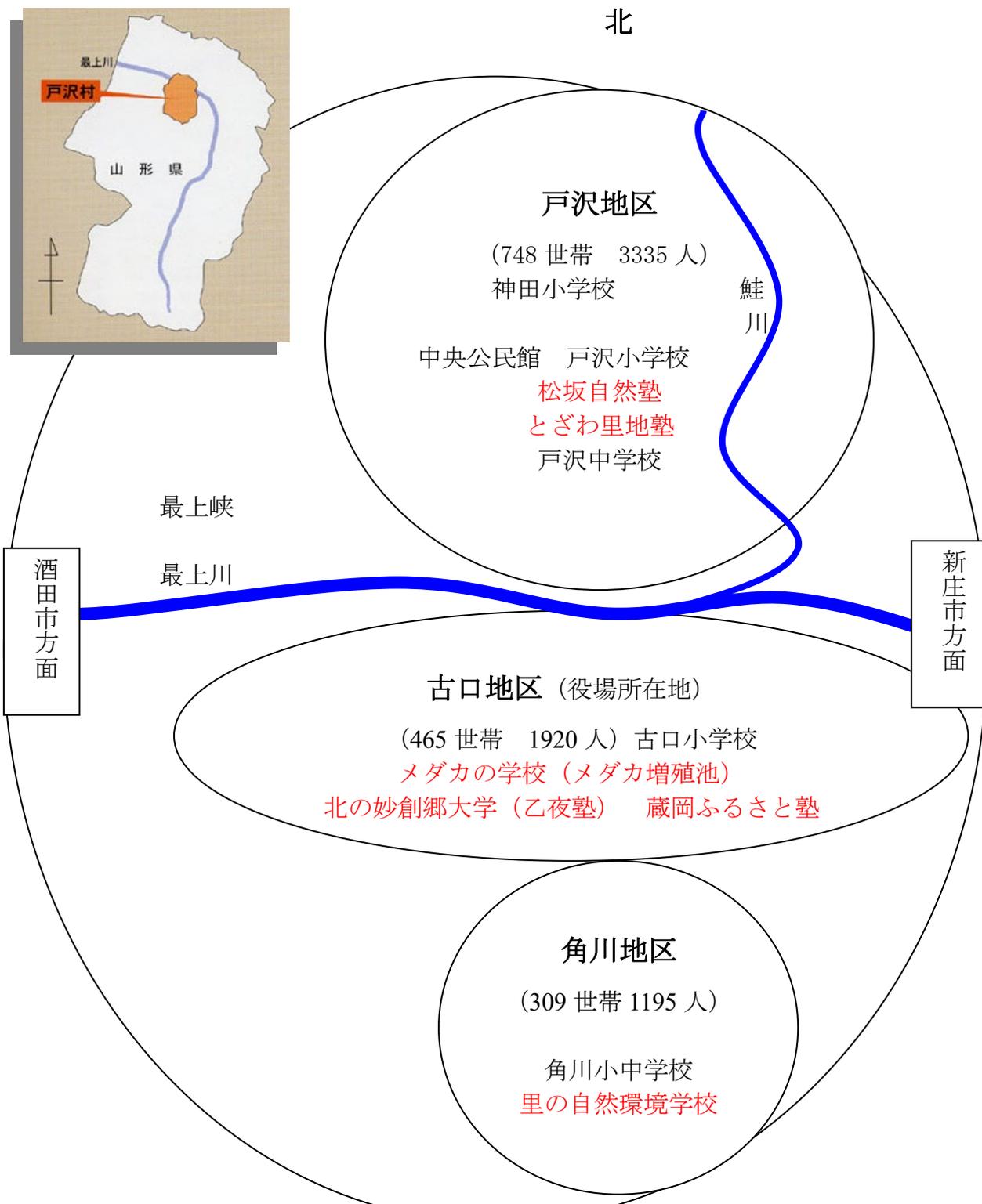
蕪栗沼周辺はよく基盤整備された生産性の高い水田だ。そのことも起因して環境保護団体が農家の理解を得るには大変苦労してきた歴史があった。だが、今、田尻町では、蕪栗沼をシンボルにして環境と農業との連携のなかで新しい地域モデルを作ろうと新たな挑戦が始まっている。それはこれまでの環境保護と農業経営の軋轢を乗り越え、人間の営みと自然の営みが共生できるビジョンを目指そうとしているということだろう。環境保護団体や地元農業者、その他広範な層の住民が「共通の土俵で互いに語れるようになる」(呉地さん)ということだ。

私が訪れた折(2004年春)蕪栗ぬまっくらぶの戸島さんと地元農家の千葉さんが、私を案内してくれた。その際、ラムサール登録に関して、地元でもっとも大きな土地改良区を訪ねるのに同行させていただいた。彼らがめざすラムサール登録とは、沼とそしてその周辺の水田湿地帯を一体的に登録するというもので、環境保全と農業振興との両方が成立できるような熱い論を展開した。それは鳥を自然の営みのシンボルにし、農業を人間の活動のシンボルとした、まさに自然と農業が融合した循環共生の壮大な理想郷だ。未来へ向けて自然と農業の新たなあり方が実現に向かって確実に動き出しているのを感じながら、私は現場を後にした。

おわりに

これら2つの事例から見えてくることは、これらの活動が、農村という一地域圏を越えた普遍的な価値を持ちつつあり、またそのことに地元の住民や運動に参加する活動者自身が気づき発信しようとしている様である。筆者には、本稿の事例を初めとする各地の地域作り活動が、一地域圏のささやかな取り組みであるにもかかわらず、非常に広範囲にネットワークを広げていく大きなムーブメントであるように思われる。それは、これらの活動自体が、おそらく理論や学問的な研究の枠にとどまらず、現代社会の一市民として具体的に実践し行動すること、社会運動に積極的にかかわるべきであることを、相互に分野は違えど運動を通底して強烈に主張しているからなのだろう。それは自己の日常生活としての、仕事としての、人間としての行動のあり方の変革を激しく要求する。研究の基本的姿勢が取りざたされている昨今だが、現代社会のこうした地域の動きを見つめなおすためには、私見では、社会活動としての文脈で研究のあり方を見直さなければならないだろう。

略図 1



戸沢村は最上川をはさんで北部の戸沢地区と、川沿いの古口地区、そして南部の角川地区の3地区に分かれる。昭和の大合併で誕生した村である。戸沢地区はよく整備された生産性の高い圃場が広がる田園地帯である。古口地区はかつての舟運の要衝で、農村と言うよりは町場である。角川地区は月山へと続く溪流角川沿いに小集落が点在する山村である。

資料1 戸沢村における地域・行政・学校による里地里山及び地域学習活動の歩み

年	地域	行政(主に教育委)	学校	イベント・賞等
87	・メダカの飼育活動開始 (北の妙)			
92	・メダカ愛好中年グループ 結成	寺内社会教育課長就		
94	青少年育成村民会議が地域で具体低に子ども達とかかわりを持つという方針を打ち出す。			
95	地域リーダー養成講座開			
97	・小規模メダカ池を掘る (翌年水利組合の工事で干上がる) ・津谷未来塾結成	青少年推進委員8名から12名に増員、高校生をもつ親の会、PTA代表も構成員に。活動費は一戸100円から300円に増額		
99				
00			県地域の学校づくり推進事業指定	
02	各学校区に地域の学校づくり推進協議会設置			
	・蔵岡ふるさと塾結成 ・南部里地探検隊結成	県単年度事業「メダカの学校事業」を受ける(古口北の妙)メダカ増殖池、炭焼き窯・小屋、小牧場、田んぼの学校設置→北の妙創郷大学設置		
03	ふるさと学習本の出版取材をかねて村内4学区で四季の活動を実施(地元学あるもの探し・とざわ里地塾)			北の妙 ・毎日新聞地方自治体賞 ・農村整備センター「田んぼの学校」助成、受ける。
04	角川地区をフィールドに地元学(戸沢地元学講習会)	機構改革で「共育課」		
	・神田妙見塾結成	自然保護推進ネットとざわ結成(各地区団体相互の連絡会機		
	・自然再生13事例認定(環境省)・里地里山活動30認定(環境省・読売新聞)			
	里地里山フォーラム、自然再生リレーションポジウム開催			

(作成、出川)

参考資料文献

参考文献

寺口端生

2001「環境社会学のフィールドワーク」(飯島伸子他編『講座 環境社会学第1巻 環境社会学の視点』有斐閣)

自然再生を推進する市民団体連絡会編

2005『森、里、川、海とつなぐ自然再生』中央法規出版

村上悟

2001『多主体参加による地域環境の持続的な利用・管理システムとしての演劇型地域経営に関する研究』

大田好信

2001『民族誌的近代への介入—文化を語る権利は誰にあるのか—』人文書院

エドワード・W・サイード

1993 板垣雄三他監修、今沢紀子訳「オリエンタリズム」平凡社ライブラリー